
キリサキ コトハ

猫川 唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キリサキ コトハ

【Nコード】

N 6 3 4 4 Z

【作者名】

猫川 唯

【あらすじ】

大量殺人鬼、霧崎琴葉。

16歳にして大量殺人に目覚めた少女は語る。

「嫌いな奴は 殺すんだ。」

序章 大量殺人鬼 切り裂きコトハ（前書き）

どうも、はじめまして。猫川と言います。

色々語っても仕方がないと思うので、作品の方を楽しんで読んでいただけると嬉しいです。

至らない文章かと思いますが、気合いで読んでいただければ幸いです。

『キリサキ コトハ』よろしくお願いします。

序章 大量殺人鬼 切り裂きコト八

クラスメイト四十名のうちの二十六名を一晩にして残虐な方法で次々と殺害し、その後自らも遺体で発見された少女、霧崎琴葉さん。以下は彼女の部屋で発見された日記の最後のページである。

道德の授業中の教室、これほど退屈な空間を私は他に知らない。

この空間で私がすることはほとんどの場合一つしかない。読書だ。それも途方もなくえげつない本。

その中でも特に誰かが惨殺されてそれが肯定されるような読み物が私の好物だ。

人を殺してはいけない、なんて一般的に当たり前だとされることを教壇から垂れ流す授業をしている教室で、道德の教科書に隠しながら、さも私は真剣に道德を学んでいます、という顔でそんな本を読むのが快感に思えてしまう。

私はそんなことばかりしている女だった。

小学校の頃から、いやもつと前からだったかもしれない。

まともな感性を持っている人間なら私がこんな女だと知ったら絶対に関わらないだろう。

でも実際には時々いる、わざわざ関わり合いになろうとする奴が、つまり変な奴が。

私はそういう奴が好きだ。

でも関わって、離れていく、そういう奴は大嫌いだ、そういうときに私はこの日記帳に名前を書き込むようにしていた。

色々あって今日、その嫌いな奴を一気に殺すことにしました。

彼女は包丁で心臓を抉られた姿で、とても満足そうな笑顔で息絶えていたという。

第一発見者のMさんら、数人が脈拍の停止を確認し、確かに亡くな

った状態で発見されたはずの彼女の遺体は大量の血痕だけを残して現場から消えたという。

以下は生前の霧崎さんを知る人のコメント。

霧崎さんの同級生Tさんのコメント

「霧崎さんは普段から殺人事件の批評とかしていて、かなり変わった人で話しかけにくかった。暗くてあまりいい印象はなかった。」

霧崎さんのクラスの担任Eさんのコメント

「あまり他の人とかかわるタイプの生徒ではなかった。いじめられていたりだとかそういう事実はなかった。」

霧崎さんの遺体はいまだに発見はされていない。

報道より抜粋

一章 琴葉 1

退屈な授業をやつとのことで終えた午後。学生の窮屈な日課から解放され、すがすがしい気持ちで伸びをする。

「隙あり！」

咄嗟に伸びをやめ、胸を抑えるがそこには既に犯人の手はない。態勢を戻す間に左胸を存分に揉まれ、華麗に手を退かれたようだった。

「・・・時音。やめて。」

おそらく本人は冗談のつもりでやったのだろうが、私は少し本気で怒った。

しかし怒られているはずの本人の表情には反省の色もなく、ニヤニヤと笑っている。

「ごめん、ごめん、琴葉がすげー美人で乳があんまりでかいから、つい。」

この女はこういう白々しい適当な事を言つて何度私の胸を触ったことだろうか。

もう今更説教する気にもなれず「はあ。」と深くため息をついた。

「ため息つくと幸せが逃げるぞ、吸え、今吐いたぶんを吸え。」
相手をするのがどうしようもなく面倒に思えて来た。

「で、もう帰るんでしょ？帰ろうぜ！」

時音は自分の机を片付け、帰り支度を整えながら私に問いかける。確かに普段なら一緒に帰るところだが、残念なことに今日は放課後に用事があった。

「ごめん、今日の放課後、用事あるんだ。なんか屋上に呼び出されて。」

時音は驚いたような表情で私の方に向きなおして身を乗り出してきた。

「呼び出して誰に！」

勢いよく私の肩を掴みながら、大きな声で問いかけて来た。

「・・・恭祐。」

時音の勢いになんとなく圧倒されながら答えた。

時音は一瞬の間を置いてまたしてもニヤニヤしだした。

「・・・へえ、城戸君か、確かに、もう教室からいなくなってる。・・・

・・・ふふ、面白い。」

教室を見まわしながら言う時音の笑い方は、どこことなく嫌な笑い方で少し鼻についたがあまり気にしないことにした。

「そういうわけだから、今日は一人で帰って、ごめん・・・」

「いやいや、用事が終わるまで待つよ。」

私が喋り終わるのを待たずに遮るようにして時音が言う。

何か私に言いたいことでもあるのだろうか。何かを面白がられているようで気分が悪い。

「・・・ほら、城戸君待たせちゃいけないから、早く行きなよ。」

時音に背中を押されて教室の外に出されてしまった。

「いつてらっしゃい。」

帰り支度をしてから行こうと思っていたのに、最後の授業で使ったものも片付けずに教室から放り出されてまた少し機嫌が悪くなった。

「・・・時音、覚えとけよ。」

廊下の窓から差し込む日光が強く、こんなときに屋上に行かないといけないなんて、暑いだろうなあ。なんて考えると屋上に向かう足取りも重くなった。ガラガラと階段を上った。

「・・・そういうえば、屋上って初めて来た。」

独り言をつぶやき、私は屋上へ続く扉を開いた。

一章 琴葉 2

扉を開け、屋上に出ると予想していたよりも暑くなくて、吹き抜ける風が涼しいくらいだった。

空も抜けるような青で、まるで空の中にも来た様な錯覚すら覚えた。

それ程広くもない屋上の遠くの方に城戸がいるのが確認できた。

城戸はフェンスに体重を預け、グラウンドの方を見ているようで、私が来た事には気付いていないようだった。

城戸の方に近付いていくと、どうやらこちらに気が付いたようで、こちらに振り返った。

「・・・来たか。」

ぼそつと城戸が言う。

「来たよ。で、用事って何？」

城戸は少し俯いた。

「・・・霧崎・・・好きだ、付き合ってくれ。」

驚いた。まるで意表を突かれた。

私は今まで十六年ほど生きてきて何度か告白されることはあったが、あまりにも予想の外で一瞬理解に苦しんだ。

放課後の屋上なんて場所に呼び出されるなんておかしいと思ってはいたが、まさかこんな話だったなんて。

「・・・・・・正気？」

私のことをほとんど知らない男に言われるならともかく、私の猟奇趣味を誰よりも知っているだろうこの男にこんなことを言われることになるとは夢にも思っていなかった。

必死で言葉を探し、やっとひねり出した言葉が、城戸が本当に正気で言っているかどうかを確認するというだけの言葉だというのだから頭が悪い。

「正気も正気だよ。俺、霧崎と小学校のころから一緒にいたけど、

いつからか霧崎のことばかり見ていた。自分でもわからないうちに霧崎のこと好きになった、だからよかったら俺と付き合ってくれ。

「この城戸とは長い付き合いだった。」

覚えている限りで小学校、中学校とずっと同じクラスで気がつけば高校まで同じところに入學し、またしても同じクラスにいた。

別段気にしていた訳でもないが、なんとなく話したりすることは多かった気もする。

私にとってはどうでもいい話だったが、服装や髪形でカッコつけているわけでもないのにルックスは悪くなく、人当たりも良く、男女を問わずそれなりに人気のある男、という風に認識していた。

どうやら城戸は真剣に言っているようだ。

この男には冗談を言うと言線が少し泳ぐ癖がある。

城戸が私に向ける視線は揺るがず、私の眼だけを見ていた。

城戸が真剣に言っているのは理解した。

しかし私にはまだ少々の疑問があった。

「・・・なんで私なの？恭祐はルックスも性格もいいし、女にもモテるんだから、私なんかよりもっと美人でまともな感性の趣味のいい女と付き合えばいいんじゃないの？」

私は自分を貶めているようであまりいい気はしなかったが、事実であろうことを恭祐に尋ねてみた。

城戸は首を横に振った。

「・・・お前、自覚ないのかよ？この学校にもお前より美人な女なんていないと思うぞ。まあお前よりも変わった女もいないだろうけどさ。・・・だいたい、自分でもよくわかんねんだから仕方ないだろ。・・・好きになっちまったんだから。」

恭祐は顔を真っ赤にして、もじもじしたように少し俯きながら吐き出すように言った。

長身で体格もそこそこの城戸のそんな姿を見て私は不覚にも少し可愛いと思ってしまった。

もともとこの男は猟奇趣味を持つ私に普通に接してくれる数少ない人物で、私も少なからず好意を抱いていた。

疑問などぶつける必要もなく、返事は大筋決まっていたのだ。

「・・・いいよ。こんな私でいいなら、・・・付き合っても。」最後の一言を口にした瞬間城戸の表情は輝きに満ちた笑顔になった。私も思わずはにかんでいた。

その後、城戸は私の方に近づき、私を抱きしめた。

このとき城戸の顔は私の背中側で、表情はわからなかったが、一瞬視界に映った城戸の表情から笑顔だったことを容易に想像することができた。

私は何に対してか判らないが奇妙な違和感のようなものを感じた。城戸が私を抱きしめるといふ行動？城戸の笑顔？城戸の告白？それともその全てに対してだろうか。

とにかく私は違和感を覚えて即座に城戸の抱擁を解き、少し距離をとっていた。

すると城戸は一瞬意表を突かれたような顔をして、少し悲しそうな表情をした。

「・・・嫌だった？ごめん、急に变なことで。」

城戸の悲しそうな表情に私は罪悪感を抱いた。

違和感の正体はわからなかったが、おそらくただの勘違いだったのだろう。

「ごめん、急で驚いただけ。」

私は恭祐に近づき、抱きしめた。

なんとなく、なんとなくだけど恭祐が今までよりも少しいい男で、今までよりも好きなような気がした。私の顔も真っ赤だっただろう。こんなこと初めてだったから。

放課後の屋上は素敵な素敵な場所だった。

一章 琴葉 3

恭祐はしばらく二人で話したあと、「まだ用事があるから。」と言って、名残惜しそうに屋上から去って何処かへ行ってしまった。なんだかとても寂しくなった。私から好きになったわけでもないのに、おかしい話だ。

「・・・そうだ、時音が教室で待つてるんだ。」
完全に忘れていた。もうあれからどれくらいの時間が経っただろう。

少なくとも三十分、いや四十分は経っているはずだ。時音は何をしているのだろうか。
待たせてしまって申し訳ないな。

そう思った私は、屋上を後にしようとした時、自分の足が軽い事に気が付いた。

屋上に向かっていた時には考えられないほどの軽快さだ。

校内に続く扉を開け、軽いステップで階段を駆け下り、時音のいる教室へ急いだ。

少し息切れた呼吸を整え、時音の待つ教室の扉を開けた。

時音は誰もいない教室で自分の机の上に腰かけ、私が机の上に置きっぱなしにしてあった本を真剣な顔をして読んでいた。

「あ、おかえり、ごめん、暇だったから勝手に本読んでた。」

時音ってこういう本に興味あるんだ。なんて一瞬考えたが、そんなことよりも待たせてしまった申し訳なさが勝った。

「大丈夫、待たせたのは私だから。遅くなってごめん。」

私は時音に謝ったが、まったく意に介さない様子で本を読んでいた。「いや、大丈夫。それよりこの本面白いな、琴葉の読む本だからどうせ危険な奴だろうって思ってたけど、すごく面白い。」

私の謝罪を軽く受け流しながら時音はページを捲った。

時音はかなり興味深そうにその本を読んでいた。

『愛情表現』。時音が今読んでいる本のタイトルだ。主人公の男が好きになってしまった女を愛情ゆえに次々殺していくというお話。

登場人物は男のしていることを決して否定しないし、むしろ肯定的で見逃してくれたりさえするという内容だ。

現実的に考えると全てがおかしい狂った世界の話。

読み物としては面白いが、この話を読んでも私は主人公の考えに決して共感することができなかった。

「・・・気に入ったならその本貸そうか？私その本何回か読んだから。」

「本当に？借りる、ちゃんと最後まで読みたい。」

時音は即答した。よほど気に入ったのだろう。

自分の趣味を初めて理解してもらえたような気がしてとても嬉しかった。

時音は自前の鞆をはさみ、本を閉じた。

時音が読書家なのは知っていたが、普段から何枚も鞆を持ち歩いているとはなかなかのものだ。

「・・・じゃあ、とりあえず帰ろうか！」

時音は伸びをしながら言った。

さっきのお返しをしてやろうと思ったが、なんだか喜ぶだけのようないきがしたのでやめておいた。

改めて帰り支度を整え、私たちは教室を後にした。

一章 琴葉 4

日照時間の長い夏。

夕暮れ時の帰り道、なんだかいつもよりも少し素敵な帰り道のように思えた。

きっとこれは城戸のおかげなんだろうなあ、一緒に帰っているのが城戸だったらよかったのになあ。

なんて考えている自分がいることに自分自身かなり驚いていた。

「・・・私、恭祐のこと好きだったんだ。」

心の声に留めたつもりが小さく声に出していたようだ。

そして時音はそれを聞き逃すほど馬鹿ではなかった。

時音の顔を見ていなかったが、ニヤリと笑っているであろうことは経験から容易に推測できた。

質問責めに遭うかもしれない。

「城戸君、やっぱり告白だったんだ。」

やはり時音はいつもよりも数倍ニヤニヤしていた。

明らかに興味があるのがわかった。

確かに時音も私ほどでないにしろ十分変人の域に分類される女だろうから、あまりそういう経験がないのだろう。

私と同じように。そんなことより今時音が少し気になることを言ったのを聞き逃せなかった。

「やっぱり？やっぱりってどういうこと？」

「え？・・・もしかして琴葉気付いてなかったの？あれだけあからさまな呼び出しで気付かないって、・・・鈍感。」

鈍感。自分でも解ってはいるけれど直接言われると少しショックだ。

しかも言ったのは時音だ。個人的に他の誰に言われるよりショックだ。

「で？城戸君とキスとかしたの？」

自分の顔が赤くなっていくのがわかった。相変わらず時音のニヤニヤは絶好調だ。いつも見てム力ついているはずの時音のニヤけ顔も普段より少し寛容な心で受け入れられたが、そんなことより恥ずかしくてしばらく黙って歩いていた。

「・・・ふふふ、顔真つ赤。琴葉は顔に出るから黙ってもすぐわかるよー。したんだねー、ふふふふ。」

時音はこらえていた笑いが噴き出たかのように喋り始めた。

もしかしたら夕焼けで私の顔が赤くなっていることに時音が気づかないのではないか。なんて淡い期待をしていたが、その期待は見事に打ち砕かれた。

時音は今までの笑い方でも十分不気味だったが、このときの笑顔は普段の数百倍無気味な笑い方をしているように思えた。何故か私は追い詰められたような気分だった。

「ふふふふふ、そんなに身構えないでよ、琴葉はホントに面白いなあ。あ、もうこんなところか。」

私は自分でも気付かないうちに身構えてしまっていたらしい、時音に指摘されて気が付いた。

周りの風景なんて全然頭に入ってこなかったがいつの間にか私と時音がそれぞれの家の方向に別れる分かれ道まで歩いてきていたようだった。

「じゃあ、またね、城戸君と、・・・お幸せに。」

時音はニヤニヤしながらそう言つと、向きを変えて自分の家のほうに歩いて行った。

一章 琴葉 5

「ただいま。」

玄関の扉を開けて家の中に向けてほんの小さな声で言う。いつも通り何の返事もない。

帰ってくるたびに憂鬱な気持ちになる家にも今日だけは少しだけ晴れた気持ちで帰ることができた。

靴を脱ぎ、リビングへ向かう廊下の電気を点け、歩いているとリビングに続くドアが開いた。

「……どうしたんだい、琴葉、上機嫌だね、声が浮ついているよ。」

真つ暗なりリビングから廊下に少し顔を出した兄が無表情に言う。

伸び放題の前髪に隠れて目を見ることはできなかったが、きつといつものように死んだ魚のような目をしているのだろう。

私はこの兄のことが嫌いだ。生理的に。人間的に。そのほかのあらゆる意味でも。

「……そんなことどうでもいいや。今日は火曜日だよ。先に行つてて。」

無表情なまま口元だけつり上げ笑った様な顔を作った。

私は振り返って二階の自室へ向かった。

私の両親は十年ほど前に事故死したらしい。

私はその事故の時にそれ以前の記憶を全て失った。

未だにほとんどの記憶を思い出せないまま生活している。

そんな私を養ってきたのはあの十五歳離れた兄であった。

ここまでで終われば温かい兄弟愛のお話だ。

事故から三年ほど経った頃。あるうことかこの兄は私の生活を保障する対価を求めて来た。

週三回、私はあの男に犯されるのだ。

身に付けているものを全て剥がされ、体を縄で拘束され、あの男の

好きなように、私の部屋で、あの男が満足するまで。
小さな頃は何かをしているのかまるでわかっていなかった。
でも今はそうではない。

何をしているのか、もうわかってる。

嫌だ。嫌だが、例えばこれで警察に言えば何か変わるだろうか。
確かにあの男は捕まるだろう。

だがそれでは私には生活する術がなくなる。

生活する術がなくなったら私は働かなければならない。

私はまだ十六歳だ。

まとまったお金を得る方法なんて体売る以外にないだろう。

それじゃあ今と変わらない。自分の意思でそんな事をするくらいならば、私は嫌々犯されることを選ぶ。

今日もこれから私は犯される。嫌々、仕方がなく。

一章 琴葉 6

「
・・・・・・・・携帯の鳴る音で目が覚めた。
メールが来たみたいだ。」

いつの間にか意識を失っていたようだ。
なんだかとても気分が悪い。体が重い。

「・・・・・・・・今何時だろう。」

真つ暗な部屋で携帯を開くと時刻は8時ちょうどだった。

今日はずいぶん早く終わったみたいだな。なんて考えながらメールを開くとそこに届いていたのは恭祐からのメールだった。

今日は本当にありがとう

霧崎と付き合えることになって嬉しいよ！

今日が記念日だな、忘れないようにしとく！

何のことないただのメール。そんな風に思えなかった。

私は恭祐を裏切った。

恭祐と付き合うことになった今日この日のうちに。

実の兄と、あんなことをしていたのだ。

もちろん望んでしていたわけではない。

だがそんなことはそれ程問題ではなかったのだ。

どちらにしても結局したのだから。

気が付けば私は恭祐に電話を掛けていた。

何のためにかけているのかは自分でも解らなかった。

ただ、そうすれば今、私の眼から溢れ出ている涙を止めることができるような気がしたから。

「・・・・・・・・もしもし。霧崎？」

「・・・・・・・・恭祐。」

「どうした？泣いてるの？」

「私、恭祐のこと、裏切った。」

「裏切った？裏切ったって、何が？」

「……私、……わた……し……」

言えなかった。兄に犯されていたなんて。

何年も、何年も好き勝手弄ばれていただなんて。

私は黙り込んでしまった。

「何があっただ？」 全部話して。」

私は全て話さなければならぬ衝動に駆られた。

自分が嫌われたくない想い。自らの性体験の暴露に対する羞恥心。それらすべての感情を抑えても余りあるほどの絶対的な衝動に。

「……あのね、恭祐。」

気が付けば私は全てを打ち明けていた。

一章 琴葉 7

涙の理由は最初からわかっていて。

何よりもしてはいけない事をしていたってことだ。

恭祐に電話したことで、涙は止まるどころか勢いを増していた。

「……………」

恭祐は沈黙していた。

「…………ごめん、なさい……………」

私はただただ謝るしかなかった。

謝ってそれ以上の言葉が続かなくなった。

「…………もういいよ…………別に怒っているわけじゃないから。」

「え？」

不自然なほど落ち着き払った声で恭祐は喋りだした。

恭祐が何を言っているのが全く理解できなかった。

理解できなかったというより、その異常な声色のせいで脳が理解するのを拒んだという感じだろう。

私はあまりにも予想外の出来事で間抜けな声を出してしまった。

「…………もう少しくらい、ちゃんとした恋人でいられると思ったんだけど……………琴葉を壊したら面白いだろうな、きっと。」

「…………何を言ってるの…………恭祐…………なんかおかしいよ。」

恭祐の言葉に声色なんてものは無くなっていた。

身の毛もよだつ程の恐怖とはこういうことを言うのだろう。

私はただただ恭祐の言葉を反芻することしかできなかった。

「君は今から僕が電話を切るまで僕の言葉だけを馬鹿みたいに集中して聞く、絶対に。」

思考の渦がまるつきり止んだ。

頭の中にあるのは『恭祐の言葉を聞く』という一つの事柄だけで満たされていた。

正確に言つと、聞かずにはいられない。そんな状態。

「君の脳ではリミッターは全て外れ、痛覚もなくなる。まるで力の加減なんてできない、そんな状態になる。そして、君は嫌いな奴は殺さないと気が済まない人間になる、さらには人を殺すと今までの人生で最高の快感を得られるようになる。」

恭祐が何を言っているのか、そんなことは全く理解できなかった。ただ恭祐の言葉を聞くと身体は安らぎ、今までに感じたことのない快感に包まれていった。

恭祐の言葉は私の耳を支配し、血管を巡って体中に広がっていった。それがとてつもなく気持ちがいい。

もつともつと恭祐の言葉を聞いていたい。

「さて、これくらい壊せば十分かな。どんな風になるかな、楽しみだ。愛してるよ琴葉。」この電話を切ると君はこの電話をした

ことを完全に忘れ、意識を失い、一時間後に目覚める。・・・じ

やあ、おやすみなさい、琴葉。・・・ブチ、・・・ツー、ツー・・・

・・・」

意識が遠のく。おかしいな、どうしてだろ・・・。

私は意識を失った。

一章 琴葉 8

「
・・・携帯が鳴っている。
ふと目が覚めた。」

さつきもこんなことがあったような気がする。
確か恭祐からメールが来た時に目が覚め、そのあと私は泣いていた。
・・・それ以降の記憶がない。
きつと泣き疲れて眠ってしまったのだろうか。

「
携帯が鳴り続けている。」

どうやら電話がかかってきているようだ。誰からだろう。
携帯を開き、表示されている名前を確認する。
時音からの電話のようだ。

携帯に表示されている時刻は9時24分。
こんな時間に何かあったのだろうか。

「・・・もしもし。」
私は時音からの電話を取った。用件が気になった。

「あ、もしもし。もしかして起しちゃった？」

時音はどことなく申し訳なさそうに言う。

「ううん、大丈夫。何かあったの？」

私は起こされた事自体は別段気にしていなかったが、時音が私を
起こしてまで電話してくる理由は気になっていた。

「・・・さつき借りた本のことなんだけどさあ、すごく面白かった。
そんでさ、琴葉がほかにどんな本を読めるのか気になっちゃって。」

時音はどことなく申し訳なさそうに喋っているような感じがした。
なんだ本の話か。
拍子抜けした。

どんな事件が発生したのかと身構えていて損した。

「それでさ、もう他のこういう本が読みたくて、読みたくてたまらなくなっちゃって。もしよかったらなんだけど、本、借りに行ってもいいかな？」

「今から？」

時音が本の話をするためにだけに電話してくるなんてありえないと思ったが、本を貸してくれなんて相談だとは思ってもみなかった。

「・・・うん、できれば、すぐがいいな。」

申し訳なさそうな時音は今までに見たことがなくすごく新鮮だった。

急な話だったが出来れば何とかしてあげたくなった。まあ、いいか。

「・・・いいよ、いつもの分かれ道の所に持っていくね。」

時音の家はそれ程近くはない。なので、近くまで渡しに行つてあげようと思った。

「え、そんな、悪いよ。時間も遅くなっちゃうし。」

とても申し訳なさそうな声だった。

こんなに申し訳なさそうな声を出す時音が面白くて仕方がなかった。

「大丈夫、私もちょっと外に出たい気分だから。」

別にそんな気分では微塵もなかったが、そう言えば時音が納得するだろうと思ったから。

「・・・わかった。ごめんね。家が厳しいからみんな寝てからこっそり行くから、着くのは12時くらいになっちゃうと思うけど、大丈夫？」

「大丈夫だよ。何冊か持つて行くから、そこから好きな奴持つて行つていいよ。」

12時は確かに遅いが、そんなことより申し訳なさそうにする時音に会つてみたかった。

「・・・ありがとう、ごめんね。じゃあまたあとで・・・。」

「うん、じゃあね。・・・プツッ、ツー、ツー。」

時音からの電話が切れた。

少し元気が出たような気がした。

一章 琴葉 9

「・・・準備、しなきゃ。」

立ち上がって部屋の電気を点け、机の周りの本を手近にあったりユツクに詰めていく。

十六歳でリュツクを背負うのもあまりカッコいい姿ではないが、ずっと持っていないといけない手提げ鞆が嫌いでリュツクしかもっていないから仕方ない。

「・・・これと、これと、・・・あとこれなんかもいいかもしれ
ない。」

時音の好みがわからないから色々な本を詰めてみた。

どれも皆、いい感じに血生臭い本ばかりだ。

私は思わず笑顔になっていた。

そんな楽しい作業をしていると、ふいに机に違和感を覚えた。

いつもの机と何かが違う。

何か足りない。

「・・・・・・日記。」

机の上から日記帳が無くなっていた。

帰って来た時には確かにそこにあっただはずの日記帳が無い。

こんなこと今まで一度もなかったのだが。何故だろう。

疑問の答えは簡単なことだった。

「・・・・・・あの男だ。」

兄。あの男しかない。

私以外に部屋の物を動かせる人間は他にいないだろうから。

あの男、本当にどこまでも私の嫌がることしかない最低の男だ。

「・・・嫌い。」

私は呟いた、小さな声で。

嫌い、嫌い、嫌い、嫌い、・・・。

頭の中で自分のつぶやきが反響する。

反響して、変化し、体中を駆け巡っていく。

．．．．．殺す、殺す、殺す、殺す。

抗えない衝動。

殺したい。

殺したい殺したい殺したい。

「そっか、私あの男殺したいんだ。」

私は自分の意思を理解した。

どうやって殺そう。

一階の台所には包丁があるし、勝手口の所に灯油もある、そう言え
ばこの机の中に裁ちばさみもあるし、リビングにあるアイロンとか
もいいかも。あ、あいつのゴルフクラブで頭を叩き割ってもいいか
もなあ。

「．．決めた。ゴルフクラブ。」

私は凶器をゴルフクラブに決定した。

あの男が大切そうにしていたゴルフクラブ。

私の大切なものを壊したあの男、一番大切にしているもので殺した
らどんな顔をするだろうか。

考えただけで自然と顔が綻んでしまった。

私は自分の部屋から静かに一階に向かった。

私は階段を下る。

一段。

また一段。

一歩踏み出すごとに心が躍る。

あの男を殺す瞬間にまた一歩近付いたという実感を踏みしめる。

・・・早く殺したい。すぐに殺したい。今殺したい。

自然と顔が笑顔になっていくのを感じた。

最後の一段、降りる。

ここはもう一階。

殺したくてたまらない、あの男のいる一階。

もう抑えきれない。

早く殺そう。

ゴルフクラブなんてもうどうでもいい。

なんでもいい、そうだ、包丁。

包丁なら台所にある、すぐその扉を開けて、リビングから行けばすぐだ。

リビングの扉を開ける。

中は真っ暗、誰もいない。当然だろう、どうせあの男は自分の寝室でもう眠っているだろうし。

これから妹に殺されるなんてこれっぽっちも考えずに。

「ははっ。」

私はもうこみ上げる笑いを声に出さずに留めておくことができなくなっていた。

電気の点いていないリビングから台所へとゆっくり歩く。

「・・・包丁 包丁 ・・・いけない、ははっ。」

あまりに楽しい気分なのでつい小声で歌い始めてしまった。

あの男に聞かれたらこの楽しい気分も台無しだ。

「・・・みーつけたっ、うふふ。」

台所の戸の中に収納されていた包丁を手取る。

真っ暗な空間に鈍く光る刃。

自分の心臓の高鳴りを感じた。

この刃があつた男を切り裂く。なんて妄想をしたら喜びで身体が震えた。

これでもうあの男を殺せる。

「・・・殺す。楽しみ。」

また声に出してしまった。

もう、今すぐ殺したい。

ううん、殺したいんじゃない、殺すの。

包丁を握りしめて台所を出る。

リビングを経て廊下へ。

廊下の暗闇の中、包丁を握りしめて歩く。

この時間がとても長く感じられた。

「到着」

兄の寝室の戸の前まで辿り着いた。

思わず声に出したが、中には聞こえないように声を抑えていた。

この戸を開けたら即、この包丁を突き立てよう。

逃げる隙、ううん逃げようって考える時間も与えないように。

絶対に殺せるように。

私は戸に手を掛けた。

そーっと、中に気づかれないように。

よし、殺そう。

「ガタン！」

私は勢いよく戸を開け、部屋の中に全速力で踏み込んだ。

「死いねえええあああ！」

私の言葉は、興奮のあまり奇声になっていた。

姿なんて確認もしないで、あの男の眠る布団に飛びかかり包丁を突き立てた。

何度も、何度も、メッタ刺しにした。

笑いながら。

一心不乱に。

ズタズタに。

私は狂喜していた。

殺した。

殺したはずなのに。

おかしい。

手ごたえがない。

「……どうして。」

狂ったように叫び散らしていた声が途端に小さくなった。

居ない。

あの男が居ない。

ここで眠っているはずのあの男は影も形もなく、そこには包丁でズタズタに引き裂かれた布団があるだけだった。

部屋の中を見回しても何処にもいない。

おかしい。

「……どうして、どうしていねんだよおおお！」

私は再び叫んだ。

叫んでも不満の発散にはならず、むしろこれまでよりも爆発しそうになっていった。

殺したい。

どうしても。

私は包丁を握ったまま、血眼になってあの男を探した。

リビング、台所、私の部屋、トイレ、しまいにはクローゼットの中まで、家中のいたる所を探したが、あの男はどこにも見当たらなかった。

見当たらないどころか、玄関の靴が一つ足りなくなっていた。

「……出かけてるんだ。」

心当たりがない、何処にいるか判らない。

「……どうしよう。殺さないと気が済まない。」

ああ、そうだ。帰ってきたら殺せばいいんだ。
簡単なことじゃない。

帰ってくるまで、退屈だなあ。
携帯を開いて時刻を確認する。

10時3分。

時音の約束の時間まではまだまだあるし、どうしようかなあ。

「・・・そうだ、良い事思いついちゃった。」

嫌いな奴なら他にもたくさんいた。

同じクラスの男ども。

みんな同じように言い寄ってきて、私の趣味を知って離れていく。

あいつらを殺してやろう。

そうしたらきつと楽しいに違いない。

「ははははっ」

殺す相手を見つけて落ち着いた事で、また自然と笑いが出てきて
しまった。

今度は周りを気にせずに笑えるから楽だ。

・・・さて、どうやって殺そうかな。

携帯のアドレス帳に名前があるやつで数えて十三人。

いっぱい殺せるのがわかって私は涎が出そうになっていた。

アドレス帳を眺めていて私は妙案を思い付いた。

私はその嫌いな男どもに順番にメールを送っていった。

我ながらよくできている。

吐き気がするほどの出来だ。

やつと嫌いな奴を殺せる。

楽しみで楽しみで仕方がない、心が躍る。

一章 琴葉 12

「ピンポン。」

玄関のチャイムが鳴る。

やっと来た、一人目。

待ちくたびれた。

「ははははっ。……やっぱり男って馬鹿ばかり。」

笑いをこらえる事が出来なかった。

単純で、原始的な脳をしているらしい。

私はただ全員に通ずつメールを送っただけだ。

今晚、家に誰もいないから、二人きりで楽しい事、したい。
だから11時30分に私の家に来てほしいな。

たったこれだけの文章に自宅周辺の地図の画像を添えて、少しずつ指定の時間をずらして送っただけ。

本当に？とか、楽しい事ってHな事？だとかの質問をされたりはしたが、返事は一様に、行く。とのことだった。

たったこれだけの文章で、信用して、私の身体が目的でやってくる。

殺されに次々と集まってくる。

セックスすることしか考えられない、精子の詰まった脳みそで物事を考えているような最低な男どもには一番似合っている殺し方だ。

私はたくさん、笑った。

もうこれ以上笑ったら私が死ぬというくらいに。

そして、これから十三人もの嫌いな人間を殺す事が出来る。次々と最高だ。

私は玄関の扉を開け、外の男を招き入れる。

「こんにちは。」

ニヤニヤした男がこちらを見ている。

・・・気持ちが悪い。

「入って、部屋に案内するね。」

内心とは裏腹ににこやかに応対する。

本当ならすぐにでもここで殺したいけど、玄関であと十二人の応対をしないとイケないのだ。

それにしても殺したい。

もう少し、もう少しだけ我慢。

「お邪魔します」

男は靴を脱ぎ、家にかかる。

「ついてきて。」

階段を上る。

男を連れて。

玄関から見えない二階で殺すために。

「霧崎、俺なんかでいいの？」

階段をのぼりながら男が私に尋ねる。

私は深く考えもせずに、答える。

「もちろん、・・・あなただから良いの。」

本心からの言葉だった。

もちろんこの男の意図していた意味と違う意味で言っているけど。

あなただからこそ、嫌いな相手だからこそ、殺したい。

そんなやり取りをしている間に私の部屋の前に着いた。

・・・やっこの時が来た。

やっとな殺せる。

「入って。」

私はドアを開けながら、自分にできる限りのかわいらしい声で言った。

男は疑いもせずに真っ暗な部屋に入った。

私もその後ろをついて部屋に入り、ドアを閉めた。

「死んで。」

私は男に向けて言った。

きつと今の私の声はさぞ嬉しそうな声なのだろう。

「え？・・・な・・・え・・・あ・・・。」

部屋の入口の近くに置いておいた包丁で一突き。

二突き、三、四、五、六・・・。

何回か刺したところから私は狂ったように笑っていた。

気持ち良い。

気持ちいい。

きもちいい。

私の脳は嫌いな人間を包丁で刺している事によって生まれる快感に支配されていった。

気が付いたら男はもう動かなくなっていた。

死んだのだろう。

何十回包丁で刺しただろう。

いや何十回では足りなくらい刺しただろう。

私の手は血塗れになっていた。

殺すのって楽しい。

早く次の奴来ないかな。

「・・・血だらけになっちゃった。次はインターホンで出ないと。」

さっきまで男だったものを部屋のクローゼットに隠し、玄関から男の靴を取ってきて、同じくクローゼットに放り込んだ。

「・・・一人。」
私は微笑した。

一章 琴葉 13

「・・・十三人。」

クローゼットの中に収まりきらなくなってしまった。

この死体の山、どうしようかな。

服も部屋も身体も血塗れだし、嫌になっちゃう。

まあでも、すごく楽しかったからいいんだけど。

着ている服の裾で手を拭って携帯を開く。

「11時36分、シャワー浴びる時間くらいはあるね あはっ。」
「とっても楽しかった。」

十三人も殺したからご機嫌だ。

十三人、みんなそれぞれ抵抗したり、私に反撃してきたりもした。

五人目の男は私に殴りかかってきたけど、全く痛くなかった。

殴られてカツとなって包丁で殴ってきた腕を切り落としてしまった。

そのあと包丁でぐちゃぐちゃになるまで切り刻んであげた。

八人目の男は私の手から包丁をはたき落として取っ組み合いになっ

たけど、男の腕を振り払ったら、その腕が変な方向に曲がって、変

な声を出してて面白かった。

一番面白かったのは十一人目の男で、包丁を突き刺してそのまま縦に振りおろしたら、胸から下が半分に別れてしまった。

あれは爽快だった。

そんなこんなで私は自分の強さを自覚した。

私ならだれでも殺せる。そんな自信すらあった。

もう時音との約束まで時間も無いし、兄は明日殺す分にとっておこうかな？

どうせいつでも殺せるだろうし。

なんて事を考えながらシャワーを浴びた。

11時52分、もうそろそろ家を出ないと約束に間に合わなくなっちゃう。

時音を待たせるのも嫌だし、もう出発しようかな。

階段を駆け上がった自分の部屋のドアを開ける。

血のおいがする。

そのおいにハッとして、電気を点ける。

床の血を踏まないために。

電気が付くとこの部屋の壁はまるでともとも赤い壁紙だったかのよう
に真っ赤だった。

「せっかくシャワー浴びたのに血が付いたら台無しだもんね。」

誰かが居るわけでもないのに、私は誰かに同意を求めるようなしゃべり方をした。

単に嫌いな奴をいっばい殺せてテンションが上がってしまっただけかもしれない。

床の血が付かないように気を付けて真っ赤なリュックを手に取り、部屋の電気を消し、ドアを閉めて、階段を駆け降りる。

携帯を見ると時刻は11時58分。

血が付かないように避けるのが大変で時間がかかってしまった。まずいなあ。

時音を待たせちゃう。

走っていこう。

私は玄関から思いっきり駆けだした。

私は走る、全力で。

時音の待っているであろう場所へ。

約束したときには考えもしなかったが、こんな時間に時音みたいな可愛い女の子を外に一人で待たせるのはいくらなんでも気が引ける。もし時音に何かあったら、その時は私が守ってあげなくては。

私は強いからだ。

周りの景色の流れが異常に早い。

不思議と今までに感じた事のない程の速度で走っている事がわかった。

きつと時音を心配して急いでいるのだろつと気にも留めなかった。

一刻も早く。

もっと早く。

「・・・時音。」

約束した分かれ道に到着すると、電灯の下に小さなバッグを持った時音が立っていた、ポツンと。いつも通りの平然とした姿で。

・・・よかった、時音は無事だ。

私の姿が声をかけると、なぜか時音は泣き出した。

「あ、・・・琴葉。よかった。来てくれた。・・・ごめんねこんな夜中に。」

涙を流しながら、時音は無理やり笑顔を作って、声を震わせながら言った。

「・・・なんで泣いてるの？」

時音が泣くようなことが何かあったのだろうか。

私は不安でたまらなかった。

「・・・琴葉が全然来ないから、無理なことと言って嫌われちゃったのかと思って・・・。」

時音は少し俯いて、小さな声を震わせて言った。

時音を泣かせたのは私だった、申し訳ない事をしてしまった。

「ごめん、色々したら遅れちゃって・・・。」

とても申し訳ない気持ちで、言葉に詰まった。

嫌いな奴を殺しまくってたら遅れたなんてとても言えなかった。

「うつん、私が急に言ったのが悪いから・・・、琴葉は気にしないでいいんだよ。」

時音は俯いたまま首を小さく横に振って言う。

なんだか時音の事がとても可愛く見えた。

もちろんいつも可愛いのだがそれよりも可愛く。

「・・・ありがとう、ごめんね、時音。・・・そう言えば、本、持ってきたよ。」

「・・・うん。」

時音は俯いたまま、バックから本を取り出して私の方に差し出す。

「ありがとうね、面白かったよ、この本。」

時音は本を差し出すと、いつも通りの笑顔に戻って言った。

よかった、いつも通りの時音だ。

私は安心して時音の差し出す本を受け取った。

「・・・うん、そう言ってもらえると嬉しい。」

私も時音の笑顔につられて笑顔になった。

背負っていたリュックを地面におろす。

しゃがみ込んで、中から本を取り出そうとファスナーを開ける。

本を出そうと、電灯の明かりを頼りに中を探っていると、立ったままの時音から不意に声をかけられる。

「・・・そのリュックについてるのって、・・・血？」

「・・・急いでいて気が付かなかった。」

このリュック、赤いリュックなんかじゃなかったんだ。

目の前にあるのは濁いた血塗れのリュックだった。

言い訳をしようと立ち上がろうとしたが、動作の途中で身体が崩れ落ちた。

私はその場に倒れこんだ。

「・・・なん・・・で・・・。」

意識はある。ただ体が動かないのだ。

「・・・琴葉？琴葉？」

時音が私を呼ぶ声だけが聞こえた。

時音は何度か私の名前を呼ぶと、私の近くでしゃがんで、私の身体の状態を細かく確認しているようだった。

私は上体を起こすこともできず、かろうじて動かせるのは首だけで、何が起きているのか解らなかった。

「・・・よっぽど急いで走って来たんだ、・・・体中の筋肉が痙攣してる。」

時音は倒れている私に向かって、私の状況を妙に冷静に分析し、解説してくれた。

「・・・そ、そうなの？どうしよう。」

カバンに付いた血のことなどお互いにどうでもよくなっていた。

なにしろ体がほとんど動かないのだから。

時音が私の体の状況を把握してくれたおかげで、少しは状況がよくなったはずだが、それでもまだどうすればいいのかよくわかっていなかった。

「・・・多分ある程度時間が経てば治るだろうけど、こんなところで倒れてたらまずいね。」

「・・・確かに時音の言うとおりだ。」

人通りの少ない真夜中とはいえこんな目立つところで倒れていたら、そのうち誰かに通報されるだろう。

「・・・ど、どうしよう、時音。」

私は困惑していた。

なにしろ全力で走ったくらいで身体が動かなくなるなんて思ってもいなかったから。

時音は少しだけ考えた後、私にある提案をした。

「・・・私が琴葉をおんぶして家まで送っていくよ。」

とんでもない提案だった。

時音は私よりも小柄で、私を背負って私の家まで移動するなんて出

来るとは思えなかった。

それだけでなくとも部屋には死体の山がある。

時音の性格上、私を部屋まで連れていくだろう。

とてもじゃないけど家まで送ってもらうなんて無理な相談だった。

「……でも……。」

私は拒否しようとして言葉に詰まった。

「……なんて言えればいいのだろう。」

家の中死体で散らかってるから無理。

そんなこととてもじゃないけど言えなかった。

上手く断る方法を考えていると、時音は私の体を起こして、無理矢理自分の背中に背負ってしまった。

「ちよ、ちよっと待って……。」

「うるさい！ 琴葉は動けないんだから、黙って私に送られればいいの。」

時音は私の言葉を遮って、少し怒ったような口調で私に言った。
さつきまでの申し訳なさそうな時音の姿ではなく、真剣そのものだった。

怒った時音は少し怖かった。

怖かったが、私は何も言えなかった。

「……強い言葉になっちゃってごめん。琴葉が急に倒れたから、少し焦った、大丈夫だよ、心配しないで。」

私の心の内を解っているかのように、時音は私に謝った。

私はやっぱり申し訳なさそうな時音よりも、こんな時音の方が好きだ。

時音は私の身体を背負ったまま歩いた。

それ程辛そうには見えないが、私を気遣って無理しているのだろう。
そんな時音を見て、家まで送ってもらうしかないと思った。

家に着いたら、なんて言おう。

ごめんね、時音、私、本当は人殺しなんだ。
・・・そんなこと、言えない。

自分で歩ければ時音は家に来なくて済むのに。

そんな思いとは裏腹に身体は一向に言う事を聞いてくれなかった。動けないのは何故なのか。

そんなこと今はどうでもよかった。

きつと人を殺すのに想像以上に体力を使っていた、とかそんなところだろう。

「・・・琴葉、大丈夫？」

私を背負って歩く時音が言う。

いつもの時音の声と違う。

時音はきつと今歩くのが辛いだろう。

私のために、自分よりも重い荷物を背負って歩いているのだから。

「・・・大丈夫、動けないけど。重いでしょ。ごめんね、時音。」
本当に申し訳なかった。

こんな私のために、こんな人殺しのために。

「うつん、重くなんてないよ、軽い、軽い、琴葉スタイルいいから。」

時音は大袈裟に首を横に振りながら言った。

苦しそうだ、早く解放してあげたい。

動かない体がもどかしい。

今、私が人殺しだと告白してしまえば、時音をこの苦しさから解放してあげられるのだろうか。

なんて一瞬考えたが、そんなこと私には出来なかった。

「ごめんね、私のせいで。」

私はただただ謝ることしかできなかった。

「もう少しでつくからね、もうすこし我慢してね。」

時音は優しく言う。

周りの景色なんて見ていなかった。

確かに、もうすぐ家に着いてしまう。
早く、何か方法を見つけないと。
………思いつかない。

無理だよ。

だって私は人を殺して、その死体を家に置きっぱなしにして、時音に会いに来たんだから。
このリュックにだって血がいっぱい付いてるし。
もうどうしようもない。

「ほら、着いたよ、琴葉。」

………ついに家の前まで来てしまった。
どうしよう、結局上手い方法なんて何も考え付かなかった。
当たり前のことだ。

私は人殺しなんだから。

人殺しであることを隠す事なんて出来るはずもなかった。

私が人を殺すのを楽しんでいるなんて事を知ったら、時音はどんな顔をするだろう。

私になんて言うんだろう。

私に向かって人殺しって、最低だって言うのかな。
そんなこと時音に言われたら……。

私、時音の事、嫌いになっちゃうよ。

私、きっと時音の事、殺したくなっちゃうよ。

一章 琴葉 17 おしまい

「・・・行こうか。」

時音が言う。

もう私にはどうにもできない。

「・・・うん。」

もう覚悟を決めるしかなかった。

「時音？こっちは庭だよ？」

時音は私を背負ったまま、周囲を塀に囲まれた庭に入る。

時音は私を丁寧な地面に下ろして、私の前でしゃがんだ。

「・・・心配しないでいいよ、琴葉。全部知ってるから。」

時音はいつものようにニヤニヤと笑っていた。

時音が何を言っているのか解らなかった。

知っている？

何を？

「ふふふ、殺したんでしょ？クラスの嫌いな奴、十三人。」

ニヤニヤした顔のまま時音が続けて言う。

何も言葉が出てこなかった。

「・・・どうして。」

必死で考えたが、何も答えが見つからなくて、時音に直接尋ねるしか方法が思いつかなかった。

「ふふふ、簡単だよ。琴葉の部屋にカメラがあるの。四台、家に誰もいないときに見つからないように仕掛けたの。あと、家の中のいたるところに盗聴器もつけてあるよ。」

時音はさっきまでよりも数倍ニヤニヤしながら言った。

意味がわからなかった。

「・・・なん・・・で？・・・何のために？」

私は出てこない言葉を絞り出すようにして言った。

「それはね、ふふつ、琴葉の事が大好きだから、琴葉の事を愛して

るからだよ、ふふ。」

理解できない。

私には何も理解できなかった。

「私ね、琴葉の事が大好きすぎて、ずっと琴葉の事を見ていたくなつたの。それで琴葉の部屋を見ていたら、琴葉がお兄さんとセックスしてるの。私の大好きな琴葉が、お兄さんに無理矢理犯されてたの。……信じられなかった。でも琴葉、嬉しそうに喘いでた。無理矢理犯されてるはずなのに、私にはちっとも嫌そうに聞こえなかった。琴葉のそんな声を聞いてると、まるで私が琴葉を喘がせているような気分になれたの。だから楽しくって、気持ちが悪くって、ずっと聞いてたの。しばらくそんな生活をしてたらだんだん満足できなくなってきた。今度は琴葉がしていることと同じことを、同じ時にするようになったの。琴葉がお風呂に行ったら私もお風呂。琴葉がトイレなら私もトイレ。琴葉がお兄さんとセックスしてるときは私も自分の兄としてたの。琴葉と同じことしてるって思うと何もかも、全部が楽しかったよ。」

時音はもう私の表情なんて見ていなかった。

私は確かに見ていた時音の表情を。

どう見ても狂ってる時音のニヤけ顔を。

寒気がした。

気持ちが悪かった。

「……そして今日。琴葉はおかしくなっちゃったの。嫌いな奴を十三人も殺した。それでも私は琴葉の事が好きだから、私も琴葉が嫌ってる人を十三人殺した。とっても、とっても、……気持ちよかった。」

時音は狂っている。

私とは別の方向に。

「それでね、私、決めたの、借りた本を読んで。私、琴葉を殺したい。大好きだから、殺したくなったの。」

時音は無気味だった。

いつもの時音じゃなかった。

でも彼女は時音だ。

私が好きな仲のいい友人、時音だ。

狂ってる、そんなこと問題じゃない、私も狂ってる。

「・・・ありがとう、時音。」

口から出た言葉は何故か感謝の言葉だった。

「・・・最期に、言いたい事とかある？」

時音は手に持ったカバンから血塗れの包丁を取り出しながら私に尋ねた。

私は時音に殺されるのか、・・・嬉しい。

「一つだけ聞いていい？」

私は時音に尋ねた。

「もちろん、なんでもこたえるよ。」

時音は言う。

「・・・人を殺すのって楽しいよな、時音。」

「・・・うん、とっても。」

理解してもらえて嬉しかった。

時音は包丁で私の胸を抉った、とても嬉しそうな表情で。

私の意識はそこで途絶えた。

一章 琴葉 17 おしまい（後書き）

まず、ここまで読んでいただいております。ありがとうございます。

まだまだ続きます、はい。

GLタグ付けるかどうか迷ったのですが、ネタばれになるので回避しました。

よろしければ、続きも読んでいただければ嬉しいです、狂ったように喜びます。

一章 琴葉 after

「・・・やっと終わった。これで十三人。」

自分の家から運転したこともない車を運転し、自分の家に置いてあった死体を琴葉の家に全て運び終えた。車の運転つてやっぱり慣れないと難しんだな。

「全部で二十六人かぁ。私と琴葉の愛の結晶ね、ふふふふ。」

二十六人もの死体が散乱する光景は壮観だった。血塗れの琴葉の部屋はとっても綺麗だった。

ついさっきまでこの部屋で琴葉が殺人を繰り返していたかと思うと感無量だった。

「・・・こうしておけば琴葉が殺したことになるよね。私が殺した分まで琴葉が評価されるの、素敵よね。」

・・・一度車を自分の家において、戻ってきた。それほど時間はかからなかった。

琴葉の家では勝手口に灯油が置きっぱなしになっているのは知っていた。

家の中に出るだけ広く灯油を撒く。

琴葉のお兄さんの部屋にあったマッチで火を放つ。

「これでいいよね、琴葉、琴葉が苦しんでいた家なんて燃やしちゃえば。」

燃え始めたのを確認して外に出る。

これで琴葉の殺した奴も、私が殺した奴もみんなみんな燃えちゃうよね。

外に出ると倒れている琴葉が視野に入る。

不意に涙が溢れ出した。

「・・・琴葉。」

琴葉の死体は満足そうな顔をしていた。理由は私には解らない。

気が付けば私は琴葉を抱きしめていた。
涙は止まらない。

「ごめんなさい、琴葉。ごめんなさい。」

私は琴葉の事を思い出した。

たくさん、色々なことを。

もう二人で遊んだりすることも出来ないんだな。
どうして殺しちゃったんだろう。

琴葉の事あんなに好きだったのに。

「琴葉、琴葉、琴葉、・・・・・・。」

私は琴葉の事を愛していたの、そして今も愛してるの。

私は嫌だった、愛する琴葉が他の誰かに奪われていく姿なんて、絶
対に見たくなかった。

このままではいづれそうなってしまう。

城戸君、琴葉のお兄さん、琴葉は美人だから他にもたくさんいるだ
ろうな。

「・・・・・・これで、よかったの。愛するから殺すの。素敵じゃ
ない。」

やっと冷静になることができた、琴葉を殺した私は正しかったの。
さて、そろそろ通報しなくちゃ。

携帯電話を開き、110番に電話する。

「・・・・・・あ、警察ですか、大変なんです！友達が、友達が、・・・・
友達の家に来たら友達が庭に倒れてて、友達の家が燃えてるんです
！・・・・場所、住所とかはわかりません、とにかく、早く来てく
ださい！・・・・名前？私の名前ですか？・・・・時音、深山時音
です！そんなことより早く来てください！・・・・。」

二章 嫌いな奴は殺すんだ。 1

「・・・・・・・・っつ。」

頭の天辺から足のつま先まで余すところなく全てが痛い。激しい痛みで意識が戻った。

体は動かない。

重い瞼を開けると目の前には見知らぬ女。

年上だろうか、顔からは落ち着いた雰囲気の影響を受ける。

綺麗な長い黒髪で、美しい。

そんな女が私の顔を覗き込んでいた。

「・・・・・・・・私、生きてるの？」

たくさんの疑問があつたが、まず何より私はこの一事が気がかりだった。

「おお、よかった、上手くいった。・・・・・・・・ってか、もう喋れんのか。・・・・・・・・コトハ、だっけ？生きてるよ今は、さっきまで死んでたけど。」

女は風貌に似合わず粗暴な口調で私に答えた。

全身の痛みのおかげで私の意識はハッキリとしていたが、この女が何を言っているのかは理解できなかった。

聞きながら周りを見渡すと普通の住宅の一室のようだった。

ますます状況がわからなくなった。

「まあ、わけわからんだろうな。後でちゃんと説明するから、麻酔かけてもいいか？」

麻酔？

この女、私の体を治してくれてるのか？

言われてみれば全裸にされている。

本当ならもっと驚く所なのだろうが、カメラで時音に裸どころか、性交している所まで見られていた事を知った後だ、今更どうということはない。

・・・そうだ、時音。

「待つて、もう少しだけ質問させて。」

身体が痛い事なんてどうでもよかった。

そんなことよりも今の状況を把握したい。

「・・・いいよ、まあ、少しくらいなら。」

よかった。

話を聞ける。

ダメだと言われたら体の動かない私なんてまな板の上の鯉だ。

好きなようにされてしまう。

「まずは名前、教えて。」

「俺か？・・・今は村上綾子だ。・・・今年で二十八歳の乱暴で男も寄り付かない独身女性だよ。」

意味不明な情報まで手に入れてしまった。

この女の情報を聞き出しても埒が明かなそうだ。

無意味な情報を聞くよりも、まず確かめるべきだった、必要な情報を知っているかどうか。

「・・・綾子さん、あなたは何を知っているの？」

私は核心を尋ねた。

そもそも私は時音に殺された。

だが、今こうしてこの女と会話している。

つまり、この女は何かを知っているはずだ。

「・・・何って、・・・難しい事聞くなあ。えーっと、お前がお兄さんに何回もヤられてた事、・・・盗撮されてた事、・・・いっぱい人を殺した事、あと、・・・おそらくもう一人いた女の子に殺されただろうってことくらいか。」

やっぱりこの女、知っている。

「時音は、時音はどうなったの？」

私は時音の事が気がりだった。

時音も十三人殺した。

もしかして捕まってしまったのだろうか。

「時音？・・・ああもう一人の子か。・・・お前が死んだ後の事だよな？・・・お前の部屋に自分が殺した死体全部放り込んでお前の家燃やした。そのあとの事は知らねえ。あとでニュース見ればたぶんやるだろ。」

乱雑だが、私の問いには答えてくれた。

時音、心配だ。

まだまだ聞きたいことは山ほどある。

「どうして私を治すの？あなたは私の味方？」

最大の疑問。

何故人殺しだと知っていて私を治すのか。

「んーっ、それはあとで答える。味方かどうかは自分で決めろ。とにかく今は治療だ。お前今全身の骨粉々だぞ。麻酔、かけてもいいか？」

・・・わからない。

全てが意味不明だが、どうやら別に私の敵ではなさそうだ。

「・・・わかった。好きにして。」

私が答えると、綾子は小さく頷いて注射針を私の腕に刺した。

徐々に意識が遠のいていった。

二章 嫌いな奴は殺すんだ。 2

「……崎さんの遺体は現場からなくなっており、警察は何者が現場から持ち去ったものとして調べを進めています。現場より以上です。」

テレビの音。

ニュースだろうか。

瞼を開ける。

……どうやらさっきのベッドの上、身体には毛布が一枚かかっている。

カーテンの間から差し込む光で外が明るい事はわかった。

身体の痛みは不思議なほど消えていた。

……動かせる。

私は上体を起こした。

……痛みはない。

全身の骨が粉々だと言われたのに、どう考えてもおかしいが痛くないし、動けるのは事実だった。

きつと相当の時間が経ったのだろう。

綾子がベッドの隣で椅子に座ってテレビを見ていた。

「……おう、やっと起きたか、痛いところ、あるか？」

綾子がテレビの方を凝視したまま、私の方を少しも見ずに言う。

「……私、治ったの？包丁で心臓刺されたんだよ？」

綾子が振り返った。眼鏡をかけている。近眼なのだろうか。

「治ったよ、まあ何とか。多分寿命は20年くらい縮んだんだろうけど。」

気の抜けたような表情で言った。

なんとなく、どこことなく、面倒臭そうだ。

「……時音。」

大切なことを忘れていた。

時音はどうなったのか。

「ん。」

綾子はテレビの方を指さしていた。

「……あれだけの人数が死んだんだ、ニュースにならないはずがない。

時音は、どうなったのだろう。

「……昨日未明、未来が丘高校の同一クラスに通う二十六名が、同クラスの霧崎琴葉さん、十六歳に殺害される事件がありました。

霧崎さんは被害者二十六名を殺害後、被害者の遺体のあった霧崎さんの自宅に火を放ち、その後友人に遺体で見られました。その後現場では不審な男性が目撃されており、事件との関係性を……。」

「……おかしい。どうして。

私が殺したのは十三人。

私は家に火なんてつけてない。

このニュースは嘘ばかりだ。

俯いて考えこんでいると、綾子が私の顔を覗き込んでいる事に気がついた。

「やっぱりおかしいと思ったか？でも、今はこれが事実ってことになってる。」

私にはわからない事が沢山あった。

まず綾子はどうしてこれがおかしいとわかるのか。

「どうしておかしいってわかるの？」

綾子は少しだけ困ったような表情をしたが、少し恥ずかしそうに喋り出した。

「……見てたんだ。盗撮のカメラの映像をたまたま傍受して、それから暇な時に見てた。」

なるほど。そういうことか。

とりあえずこの謎は解決。次だ。

「……どうやって、あんな状況から私の事をここに連れて来たの？」

どう考えてもおかしい。

時音や、警察、消防士の人も来ただろう。そんなたたくさんの人がいる中で私の死体を持って移動なんて出来るはずがなかった。

綾子はニヤリと笑って、私に向けて言う。

「・・・いや、簡単なことだよ。・・・ちょっとした魔法を使ったんだ。」

二章 嫌いな奴は殺すんだ。 3

魔法？

何か普通では思いつかない様なトリックだろうか。

「まず、今俺の使える魔法から説明するぞ。物体と物体の交換、あと物体をその物体につり合うものと交換できるんだ。」

「……この女は何を言っているんだ。」

魔法？

本当に魔法の話か？

「くくく、お前今、何を馬鹿なこと言ってるんだろこの女は、って顔してるぞ。正直すぎて面白いぞ、お前。」

どうやら表情に出してしまっていたらしい。

というか、表情に出さないと出来ののだろうか。

この科学の時代に魔法なんて存在を議論することすら馬鹿馬鹿しい。「まあ、そんな顔するなよ。……しょうがないな、見せれば納得するだろ？」

私がよほど不機嫌な顔をしていたのだろう、綾子は苦笑いをしながらポケットから履いていたジーンズのポケットから、煙草の箱とオイルライターを取り出した。

「お前、ちよつとこれ持つてろ。」

「うわっ。急に投げないでよ。」

綾子が私の方にライターを放り投げる。

私はそれを慌てて受け止め、じっと見つめる。

「……まあそのままちゃんと持つてろ。」

そう言った綾子の周りから何かが湧きあがってくるのを感じた。表現するなら、綾子がいる場所を中心にして緩やかな風が吹いているようだった。

綾子は異様に真剣な顔だった。

「……気付いてるか？」

綾子が言う。

綾子の周囲の空気の違いに圧倒されていると、手に持っているはずのライターが、煙草の箱に変わっていた。

私は自分の手に持っているものが変わったのに何の異変も感じなかった。

綾子に触れられてもいない。

「・・・すごい。・・・確かにすごいけれど、マジックでも多分出来るよこれ。」

私は疑わざるを得なかった。

魔法の存在なんてそう簡単に認められない。

綾子は眉間にしわを寄せた。

「そういうこと言うなよ。現にお前はこの魔法でここに移動してるんだから。」

・・・それでも認めがたい。

そんなことが出来るはずがない。

「・・・まだ疑ってるのか?・・・面倒だなあ、魔法使うのって疲れるからあんまり見せるためだけにやりたくないんだけど・・・」

「

綾子は腕を組んで少し悩んだようにしていた。

少して、ニヤリとして私に言う。

「くくく、いいよ、次見せるので一発で信用させてあげるよ。くくく。」

綾子の事をまだよくわかってないが、よからぬ事を考えているだろうことは一目瞭然だった。

・・・別に隠してる様子もなさそうだが、魔法を信用できるなら、信用したい。

「くく、・・・お前、俺と一緒に風呂入るか?」

綾子は笑いを堪え切れない、といった様子だった。
何かおかしい。

・・・あ。

この女が考えている事が予想出来てしまった。
間違いない、この女は魔法が使えるんだ。

二章 嫌いな奴は殺すんだ。

4

「・・・入らない。入らないけど、今考えてることやって見せて。」
私が思っていることが正しければ、この女は魔法使いだろう、何かトリックがあるとしたら思いつきでいつでもできることじゃない。
「・・・くくく、わかつちゃったか。お前意外と賢くて柔軟な脳みそしてるみたいだな。・・・見せてやるよ、もうお前立てるはずだから、・・・ついてきな。」

綾子は笑いながら立ち上がる。
私もそれに続いてベッドから降り、立ち上がる。ベッドの上からは見えなかったが、フローリングの床には不思議な図形がたくさん書いてあって、魔法使いの部屋って本当に魔法陣とかあるんだなあとなやニヤ笑ってしまった。

綾子の先導に従って、部屋を出て廊下を歩く。
見れば見るほど普通の家だ。

玄関らしきところを通過し、綾子は廊下の奥から二番目のドアを開け、そこに入っていく。

脱衣所があつて、その奥に風呂。

普通の一般的な家庭の風呂場。

綾子は浴槽のふたを開ける。

お湯が張つてある。

入ろうとして準備してあつたのだろうか。

「・・・さて、お前の予想通りの結果になるかな？・・・少し量が多いから集中が必要だ。」

綾子は笑顔のままそう言うと、真剣な表情になった。

周りの空気が張り詰めていくのがひしひしと伝わってきた。

綾子の足もとから強い風が吹きあがる。

綾子から湧き出る強力な何かで周囲の景色が揺れる。

・・・今度は見逃さなかった。

「……やっぱり、……本当に凍った。」

「・・・はあ、はあ、・・・なんだ、妙にリアクション薄いな、普通は魔法見たらもつと騒ぐだろ。・・・正確にいうと凍ったんじゃないくて、お湯を氷に変えたんだけだな。」

やはりすごく体力を使うのだろう。

自分でも驚くほど冷静だった。

この女は魔法使いで、魔法で私を運んだのだ。

綾子は感心したように笑いながら言った。

ドアが勢い良く開く音がしたかと思うと、叫び声が響いた。

玄関の方だろうか、明らかに誰かに対して怒っている男の声だった。

「うん、うん。」

・・・・聞きたいことは全然聞けなかったが、確かにお腹は空いていた。

「・・・わかった。」

仕方なく私は同意した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6344z/>

キリサキ コトハ

2011年12月25日16時48分発行